

解凍的創造のための装置としての本について—田中栄子「unzipped」のための覚書

作品が「完成」に至るまでのプロセスには、貴重なものがある。作品はすばらしい。だがそこに至るプロセスにも、きわめて興味深くとても重要なことがあるのだと、僕は常々思っている（何が完成であるかはひとまず置くとして）。

作品を作るプロセスでは、さまざまな思考や実験が繰り返し行われる。できあがったものとしての作品は最終形であり、ある意味で成長を止めている。一方プロセスは未完成であるがゆえに、むしろ多くの可能性を可能性のままに内包している—子どもあるいは卵のように。

プロセスにおいては、いま行われていることが最終的に「作品」になるかどうか、作者にもわからない。制作物も作者も、最終形態が見えない「迷い」の渦中にある。こうしようというアイデアが複数ありえる中間状態。そこから、さまざまな試行錯誤と作業、すなわち、何とかして先あるいは別の方向へ進もうとする一手一手がくりだされる。制作物と作者はともに前進する。判断や作業の結果がものに刻まれ、素材なのか半作品なのか未分明な、まだかたちのないものから、徐々にあるかたちが浮かび上がってくる。そこから「作品」が現れてくる広い背景、そこに働いている複雑な力の流れ—芸術資源的アフォーダンス—を感じとることができる。それが、制作のプロセスである（もうひとつプロセスにおいて重要なのは、制作途上のものがしばしば、未完であるがゆえに「下手」である—ように見える—ということだ。未完成のデモテープやアイデア書きに接して、「僕にでもできる！」と思った経験があなたにもないだろうか）。

たとえば、The Beatlesの最高傑作"Strawberry Fields Forever"には、完成するまでの諸テイク（少なくとも26以上あるという）を記録した音源がある。"Strawberry Fields Forever"の最終形だけから、テイク1の様子をありありと想像することは不可能だけれど、時間を逆向きにたどって、最終形を記憶にとどめながらテイク1や2や6を聴くとき、鑑賞者はテイク1から「作品」へと至る可能性のさまざまな線（そこから伸びていった線、伸びていかなかった線）の豊かさを感じることができる。

こうした意味ではプロセスの方が、むしろ最終的な作品よりも多様な可能性を内包しているとも言える。プロセスの面白さはここにある。そして僕は、本というものが、少なくとも視覚芸術におけるこうしたプロセスの記録にとっても適したメディアだと思っている。

考えてみれば、本とは不思議なメディアである。完成形ではない1ページ1ページの紙片は、バラバラにしてしまえば断片になってしまう。しかし、紙片をある順序にならべ、固定して綴じた瞬間に、それは「本」という新たな物質性をもつ、まったく別のメディウムに変容する。

個別の頁はもはや単独の存在者であることをやめ、他の頁との関係のなかで理解されることを読者に要求する。表紙から奥付へと進む時間性がうまれる（だから本は、すごく長い物語を語るができる）。本になった紙片はもはや机に横たわる弱々しい物質（放っておいたらどこかに消えてしまう資料）ではなく、棚に収められても自己の存在を主張する背表紙という強さを獲得する。背表紙とその中身のあいだには記号的対応関係が生まれ、表紙を開いて、このタイトルが意味するところを読み解いてほしいというメッセージが、読者に向けて発せられる（「私を手にとって」「じっくりと私の話を聞いて」「私を思い出して」）。

でもだからといって、本が要求する通りにしなければならない理由もない。そもそも頁をめくる時間の配分は、読者の自由にゆだねられている。どこから読んで／見てもいいし、ある頁の次に数十頁飛んでもいい。その見開きだけに目を奪われてもいいし、その頁をいくつもの他の頁（同じ作者の、あるいは別の作者たちの）に連なるプロセスの一部として感じることも許されている。僕は、自分が好きなリズムで、創造的なプロセスのなかに入ることができる。

たとえて言えばそれは、いくつもの相互に影響を与えあう、あるいは全く無関係だと思われるが自分にとっては滅茶滅茶関係がある楽曲や音をつなげ、オリジナルのリズムやアレンジすら変容させながらリミックスしていく行為に近い。記されたものを自由自在に読み解くという意味で、読書あるいは頁をめくり／たどり、本とともに何かをする行為は、いわば「解凍的創造のプロセス」である。そしてここまで来れば、本を読む／見るという行為は、制作することにかぎりなく近づいてくるのである。